

聖書:列王記第二5章10~19節

説教:イスラエルに神がおられる

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ってから今日のところに入ります。イスラエル王国の北にあったアラムにナアマンという非常に優れた軍人がいたのですが、彼はツアラアトという病気に冒され、ずっと苦しんでいました。そのとき、イスラエルから捕虜として連れて来られた若い娘が、「サマリアの預言者のところに行かれたら、きっと、その方がご主人様のツアラアトを治してください」と語ったことがきっかけで彼は、イスラエルの王のところに出かけます。ところがイスラエル王の思い込みもあって、一時は戦争になりかけるほどの険悪な雰囲気になったところへ、預言者エリシャが「ナアマンを自分のところによこしなさい」と語り、それでナアマンはエリシャの所に向かった。これが前回までのあらすじでした。この後、ナアマンがどのように救われていくのか、ともに見てまいります。

1 罪が取り扱われる

1) 憤り

まず9節を読みます。「こうして、ナアマンは馬と戦車でやって来て、エリシャの家の入り口に立った。」

アラムの国の将軍にふさわしく馬と戦車に乗ってきナアマンでしたが、エリシャはどのように迎えたのか。それが10節です。「エリシャは、彼に使者を遣わして言った。『ヨルダン川へ行って七回あなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからは元どおりになって、きよくなります。』」

これを聞いたナアマンは激怒します。ひとことで言えば将軍としてのナアマンのプライドが許さないので。それでナアマンは引き返そうとします。

2) 神の導き

しかしそこで話は終わりません。13節。「そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言った。「わが父よ。難しいことを、あの預言者があなたに命じたのでしたら、あなたはきっとそれをなさったのではありませんか。あの人は『身を洗ってきよくなりなさい』と言っただけではありませんか。』」

このことばが後押しになって、ナアマンはヨルダン川に入る決心をし、14節に書かれているとおりに

に彼は救われていきます。このときのナアマンの心の動きについては後で触れることにして、その前にナアマンの周りにいた人たちのことを考えます。

振り返れば、ナアマンが救われるまでに、多くの人たちが関わっていました。そもそもの発端は、イスラエルから連れて来られた娘でした。この娘が、「サマリアにいる預言者がご主人を治してください」と言ってくれました。続いてアラムの王が喜んで手紙を書いて送り出してくれます。そして、ナアマンの部下。今挙げた人たちの一人でも欠けたていたならナアマンは救われなかったはずで。ナアマンは運がよかったという事ではありません。ナアマンが救われるように、神が導いていると見なければなりません。言い換えれば、「静かに」神の奇跡が起きているのです。

私たちは奇跡と聞くと、モーセがしたように海が二つに分かれてその間を渡って行くというような壮大な光景を思い浮かべます。でもどうでしょうか。私たちがキリストを神と信じて、毎週教会に来て礼拝して、こんなことはごく普通のことのように見えますが、実はそうではない。そもそも神尾知らなかった者が神を信じることができた、これこそが奇跡ではなかったのでしょうか。神にとってもっとも大きな奇跡は、山を動かすことでも、海を二つに分けることでもありません。人が救われることなのです。それが自分の中に起きている。私たちはそれほどに神に愛されていることを思い起こします。

3) 罪に向き合う

しかしここで勘違いしてはいけません。神に愛されていることと、甘やかされていることとはまったく違う。愛されているということは、何か私たちのうちに問題があれば、神はその問題を徹底的に取り扱うことを意味します。

ナアマンもそうです。ナアマンはエリシャのことばを聞いたとき、真っ先にこう思いました。イスラエルという敵の国に来て、将軍の服を脱ぎ、裸になってヨルダン川に入る。そんな恥ずかしいことができるか。しかし、もしこのまま自分の国に帰ったらどうなるか。そこには人もうらやむような地位も名誉もお金はあります。でもツアラアトがある限り、人にさげすまれ、うとまれ、差別され、人と自由に交わることができない。そういう

一生が待っています。それがいやでなんとかしたいと思ったから、わざわざイスラエルまでやって来たのです。しかしナアマンのプライドが邪魔をします。プライドは巧妙に問題をすり替えます。彼は、エリシャの失礼な態度こそが問題なのだと言い張りしました。しかし神は、ナアマンが隠そうとしている本当の問題に切り込んでいきます。いったい何が問題だったのか。

彼がツアラアトであったことを思い起こしてください。顔や手はもちろん、全身に皮膚のただれやみにくい腫れ物があります。ふだんは、服や帽子、スカーフのようなもので見られないように巧妙に隠してきました。こうしておけば部下にも見られません。しかしエリシャは言うのです。「七回あなたの身を洗いなさい。」つまり裸になれということです。というのは、レビ記によればツアラアトである者が着ていた服は汚れているとみなされ、洗わなければならないと書かれています。おそらくエリシャはそこまで指示していたはずで、ということ、ナアマンは部下の前で裸になってツアラアトをさらさなければならないということ。絶対にそれだけはしたくない。

4) 励まし

そんなときにナアマンのつらさを思って声をかけてくれたのが、彼の部下でした。「あの人は『身を洗ってきよくなりなさい』と言っただけではありませんか。』」そのことばの裏にはこんな思いが込められていました。「私たちのことを気にしないでください。あなたがどんな体であろうとも私たちはあなたを尊敬することには変わりありません。」

このことばに後押しされて、ナアマンはヨルダン川に身を浸す決心をします。一枚一枚服を脱ぎながら、彼をおおっていたプライド脱ぎ捨てていきました。その結果は書かれているとおりです。

2 神を知る

1) 信仰告白

救われたナアマンはこのように告白します。15節後半。「私は今、イスラエルのほか、全世界のどこにも神はおられないことを知りました。どうか今、あなたのしもべからの贈り物を受け取ってください。」

かつてイスラエルからナアマンのところへ連れて来られた娘が、「サマリアに預言者がいる」と知らせてくれました。それでサマリアにやってくると、こんどはエリシャが、「あなたはイスラエル

に預言者がいることを知ることになる」と告げました。それが今ナアマンはなんと告白したか。イスラエルに預言者がいたとは言いません。その代わりこう言うのです。「イスラエルのほか、全世界のどこにも神はおられないことを知りました。」

長く苦しんでいた病気が治ったとき、人はどんなことばを語るのでしょうか。私ごとになりますが、息子が中学一年の時に発症した病気は、日本でも非常に珍しい難病でした。町の病院に行ってもまったく判らないと言われ途方に暮れていたとき、ある方の紹介で大学病院のM先生に診てもらったところ数ヶ月後に病名が判り、治療できるようになりました。ですからM先生にはいまでも感謝しています。皆さんもそんな経験があると思います。

ナアマンはどうだったのでしょうか。病院の先生に感謝する気持ちだったのでしょうか。そうではない、それとはまったく違う次元です。それがどうしてわかるか。

2) 世の戦い

18節です。「どうか、主が次のことについてしもべをお赦しくくださいますように。私の主君がリンモンの神殿に入って、そこでひれ伏すために私の手を頼みにします。それで私もリンモンの神殿でひれ伏します。私がリンモンの神殿でひれ伏すとき、どうか、主がこのことについてしもべをお赦しくくださいますように。」

リンモンは神の名前で、日本では「雷神様」、つまり雷の神、もっと言えば五穀豊穡の神にあたる神であったようです。自分の上司であるアラムの王がリンモンを拜むとき、ナアマンも一緒にひれ伏さなければならないというのです。そのことをナアマンは非常に気にしている。もしナアマンが、自分の病気を治してもらってよかった、そんな程度でとらえていたのであれば、リンモンの神のことは問題だと思いません。しかし彼はこのこのことを深刻な問題だと捉えました。なぜですか。神を知ったからです。知るというのは知識で知ったのではなく、自分の人生をひっくり返すくらい大きな存在として出会ったということです。

問題はそこからです。神を知ったからといって、この世界から出て行くことはできません。自分が生活してきた家庭や職場に留まり続けます。そうすると問題となってくるのは、異教の神々のこと。ナアマンにとってはリンモンの神が大きな問題として横たわっています。

皆さんもこれと同じ経験をされているでしょう。親族の葬儀のとき、お盆やお彼岸のとき、家族総出のお墓参り。七五三のお祝い。おひな様、端午の節句。神社での結婚式。そういうときクリスチャンである自分はどうしたらよいか。いつも悩みます。

3) 安心して行きなさい

ナアマンはどうしたか。前後しますが17節を読みます。「それなら、どうか二頭のらばに載せるだけの土をしもべに与えてください。しもべはこれからはもう、主以外のほかの神々に全焼のささげ物やいけにえを献げません。」

いったいどうして土を持ち帰ろうとするのでしょうか。ある方はこのように説明しています。「リモンの神にひれ伏さなければならないときに、この土を密かに自分の足もとにまいておいて、イスラエルの神を礼拝するためだったのだろう。」

これに対して、誤魔化しだとか、いやいやしようがなかったのだとか、いろいろ意見があるでしょう。どれが正解なのかと問われても、私はおそらくおそらく正解はないだろうと思います。それでもこのように考えることはできるでしょう。問題は、何をしたとকাশないとかではなく、神がどのように評価されたのかを見ていくことではないでしょうか。

ナアマンの場合はどうだったのか。19節前半。

「エリシャは彼に言った。『安心して行きなさい。』」これが答えです。具体的にこうしたらよいという方法が問題なのではありません。リンモンの神の前でひれ伏さなければならないとき、心の中に何を思っているのか。唯一の神に対して、まことに申し訳ない。もしそう思っているのなら、それでよい。あなたは安心して歩むことができる。そう言ってくださる。神は、私たちがこの世でどんなにつらい目にあっているかよくご存じなのです。

ご自分のひとり子さえ惜しまずに与えてくださる神を、何も知らなかった私たちに教えてくださり、救いへと導いてくださった神に感謝します。